

中期ウィットゲンシュタインの見取り図

『哲学的考察』と『哲学的文法』の分析を中心に

木本 蒼 (京都大学)

本発表の目的は、「中期ウィットゲンシュタイン」に分類される『哲学的考察』と『哲学的文法』を取り上げ、加えて後期の『哲学探究』の計三つテキストをもとに、それぞれの時期における思想の比較考察を行うことである。それによって、それぞれの時期における哲学的問題の解消方法と、「言語」観念の明確化を試みたい。

【はじめに】

前期著作の『論理哲学論考』の執筆、並びにその後の十年間の沈黙を経て、1929年にウィットゲンシュタインはケンブリッジに戻り、現在は遺稿として保存されている種々の草稿を書き始めることになる。この時期の彼は、ワイズマンが1934年にシュリックに宛てた手紙で「彼はその瞬間のインスピレーションを追い求めており、以前に取り残したものを捨て去っている」と報告しているように、何度も劇的な思想的変貌を遂げている。

その軌跡を表すテキストのうち、邦訳全集で出版されているものとして、『青色本・茶色本』(第6巻)や『ウィットゲンシュタインとウィーン学団』(第5巻)の他に、1930年までの思考の軌跡を示す『哲学的考察』(第3巻、以下『考察』)と、1932年末から1934年までの草稿や書き直しの指示などをもとに編集された『哲学的文法』(第4・5巻、以下『文法』)を挙げることができる。後期著作『哲学探究』(以下『探究』)の核となる思想が形成されるまでのこの期間は、しばしば「中期ウィットゲンシュタイン」と呼ばれている。

スターンは、多くの研究者が「中期ウィットゲンシュタイン」を思想上、『探究』のためのたんなる準備的期間としてのみ捉えており、また、前・後期の境界線の画定ばかりに興味を示していることを批判している。それに対して彼自身は、この時期自体がもつ独自性と意義を認める仕方では解釈を行おうとしている(Stern 2018)。本発表において『考察』と『文法』、そしてその後の思想としての『哲学探究』という三つのテキストに定位して思想を比較する際、以上のスターンの忠告に従い、以上の三分割を決定的で最終的なものとして主張することは控えたい。そうではなく、それぞれの特徴的な側面を取り上げ、比較することで、錯綜した中期思想に展望の利いた見取り図を与えることを試みたい。

【三つの時期の類似と相違】

「中期ウィットゲンシュタイン」において、哲学的問題を解消するという目的は、どの期間においても一致しているが、その方法において異なっている。概略的に述べれば、第一に、『考察』では「現象学言語」によって言語の本質を把握することで問題を解消しようと試みられる。第二に、『文法』の時期には「計算としての言語」という観点が導入され、言語使用を一定のルールに従った操作として見なす考えが前面に出る。第三に、それ以降の『探究』へと至る時期においてはよく知られた「言語ゲーム」が考察観点として圧倒的となり、生活形式に依拠した人間の言語活動という観点から言語が捉えられるようになる。

(1) まず、『考察』では、日常的に用いられる使い勝手は良いが粗雑な「物理言語」と、言語の記述する対象である現象に忠実に精密な「現象言語」が対比される(PB 1, 57)。

この時期のウィットゲンシュタインの方法論は、前者から後者への表現の置換によって、言語における本質を明らかにすることで

ある。その際、言語の役割は、直接所与の記述であると考えられており、謂わば言語は現象に従属している。

(2) だが、『文法』では、この考え方は退けられていることが、「第一次記号」と「第二次記号」についての論述から明らかとなる。「第一次記号」とは、名指しのように現実と直接の関連をもつ言語使用であり、他方「第二次記号」とはその意味において間接的でしかない言語使用であると言える(cf. PG I-46)。直接所与の記述を言語の機能としていた『考察』からすれば、「第一次記号」が重要視されるはずである。ところが『文法』においては、この二種類の言語使用の序列関係が認められておらず、(同上; PG I-54)、もはや言語は、現象・現実に従属的と見なされていない。

また『文法』では、「計算としての言語」という観点が導入される。「計算」という表現は以下二つの含意を持つ。

(2-a) 足し算・引き算のような計算は、四則演算という体系のなかで行われる。同じように、「計算」として捉えられた言語活動は、特定の規則体系のなかに位置づけられる。

(2-b) 「計算」の一步として言語活動の一部を見なすことは、本来は、流動的で曖昧な現実の言語活動を、仮説的に、明確な規則に従ったものとして見なすことである(PG I-35, 76)。これは、言語使用が実際に、明確な規則をもつという主張ではなく、哲学的な混乱を解消するためにこのように仮説的観点から物事を見なすことは役立つということである。

(3) この「計算としての言語」という観点は、『哲学探究』に至ると「言語ゲーム」という概念にとって代わられる。「計算としての言語」では、実際の言語使用から独立した規則の総体として言語が捉えられるに対して、「言語ゲーム」では、言語使用・活動の総体として捉えられている(Lugg 2013)。先の(2-b)に基づいて敷衍すれば、「計算としての言語」においては、言語使用が生硬で無機的な仕方では描写されていたのに対して、言語が「言語ゲーム」として見られるときは、実際の使用における有機的な側面を捉えることにも重きが置かれているのである。さらには、『文法』には見られない「生活形式」という概念、つまり「生」(Leben)という単語が『探究』において使われるようになることと呼応していると言えるだろう。

【まとめ】

以上のように、『哲学的考察』と『哲学的文法』、そして『哲学探究』と、三つの著作におけるウィットゲンシュタインの思想を比較することで、哲学的治療の諸方法と特徴的な「言語」観念が明確化され、「中期」思想に対する展望の利いた見取り図を得ることができると期待される。

(主要参考文献)

ウィットゲンシュタイン, 1975, 『哲学的考察』(奥雅博訳), 大修館書店.(PB)

———, 1975, 『哲学的文法』(山本信訳), 大修館書店.(PG)

———, 2020, 『哲学探究』(鬼界彰夫訳), 講談社.

Lugg, Andrew, 2013, “Wittgenstein in the Mid-1930s”, in *The Textual Genesis of Wittgenstein’s Philosophical Investigations*, Routledge.

D. Stern, 2018, „Wittgenstein in the 1930s“, in *The Cambridge Companion to Wittgenstein*, Cambridge University Press.